



鹿児島県 桜島

それぞれの物差し
02

見えないバーコード

文 肝付高夫

text by Takao Kimotsuki

湾岸戦争のとき初めて登場したステルス戦闘機というのがあった。レーダー網をくぐりぬけていち早く目標に接近する見えない戦闘機である。

東京デイズニールランドで、一度入場した者が途中で外へ出ようとするとき手にスタンプを押される。これも見えないインクだから、手に何も跡形は残らないが、再入場するとき、照射される赤外線的光に反応してピッ、パッとやる。ここで、その人がすでに入場料を払っているということが判るのだが、この原理を例の商品管理のバーコードに活用している。

バーコードは、売るほうからすれば、商品管理に便利で、すばらしい機能を発揮したので、それこそ、疾風、甚雨のような早さで世界中に普及したが、どうもあの黒いタテ縞模様はすっきりしない、というより邪魔ッ気である。

ことに小型の瓶入りなどで、そのもののムードを重視する商品、例えば、化粧水や香水といったものではこのタテ縞は目障りである。洗練された透明なガラスの中に、それと思わせるようなつましい液体が入っているのに、黒いバーコードが、その瓶のほとんど片面を占領している。それを購める女性でなくとも

「なんだか、安っぽくて汚くて、これってこんなに高いものなの？」とこぼしたくなるような気になる。

書籍の場合もそうである。魅惑的なキャッチフレーズと典雅な文章をちりばめた腰巻きで、素晴らしい仕上がりの装丁と自肩を持ったその裏表紙に、あのタテ縞の無粋さは、まるつきりぶちこわしという製本業者も少なくないはずであり、書籍愛好者も舌打ちしつつページをめくるという次第であろう。

といったところで、東京デイズニールランドと同じ方式の、肉眼ではほとんどそれと識別できない無色透明のインクでタテ縞を印刷するバーコードが考案されたというわけである。

開発した会社によって紫外線を当てるか、赤外線を当てるかの違いがあるし、その名もさきの湾岸戦争の戦闘機の例をとって「ステルス型バーコード」と呼ぶのもあるそうである。

インクは、特殊な蛍光体に粉土類を混ぜて作っており、ごく薄いブルーであるが、よほどの眼力でなければ無色透明に見え、このインクで印刷したバーコードに赤外線を当てるとピッ、パッと光るのである。

これで洒落た香水瓶も知的な書籍も黒いタテ縞の野暮ったさから解放される。見えないバーコードの上に自由に印刷ができるなら全体のデザインを損なうこともない。バーコード用のスペースも不要と万事めでたしのようにあるが、いままでクロ縞の読み取り機に設備投資しているというだけで、それほど普及の足を早めていないようである。

とはいえ、必要な情報をバーコード化して見えないカードに印刷し、そのうえにデザインを刷り込めば、下に何があるか、さっぱり覗けなくなる。そのうちに、パスポート、免許証、各種証券や証書、各種クレジットなどの一部分にでもこのインクを使えば、無造、偽造の防止にかなり役立つものと予想されるがどうだろう。

スーパーなどで、レジ嬢が、一つひとつ値段を読み上げながら、バーコードをピッピッとやるあの行為をスキヤニングという。混み合う時間、行列を作って、ぞろぞろと動きながらそれでも無為の時間を待たされるときのいらいらはどうしようもない。

このインクができたことによつてすぐに想定するのが、客が自分でスキヤニングする無人チェックアウト方式。客は自分の買い物も籠から出して、ピッ、パッとやって一つずつベルトコンベアに載せる。コンベアの終点にその締め切りを受け持つキャッシャーがいれば、そこで金を払って終了ということになる。そんな能率的なレジはないものか？

平成不況といい、リストラといえ、肩を叩いて人減らしをするのが能とされているが、顧客の接遇とかサービスとかの面から、それを考えている向きは少ない。

Profile

本名・東正知。1924年生まれ。

民間放送勤務の後、ホテル経営を経て、FM局創業。フリーライター。作家。文芸同人誌「原色派」(鹿児島市発行)準同人。著書に「くらの煙草」「カルカノの觸感」「市長の晩餐会」「それぞれの物差し」①②など。